

# 認知的侵入可能性と基礎的知識

笠木 雅史 (Masashi Kasaki)

日本学術振興会特別研究員 PD 京都大学文学研究科

知覚が認知的に侵入可能であるということは、簡単に言えば、「二人の認識主体が、同一の外的状況下で同一の外的刺激に対し、異なる内容を持つ知覚経験を持つことが可能である」ということを意味している。二人の認識主体の内的な条件、例えば、二人の持つ知識、欲求、信念などの心的状態が異なる場合、その二人が同一の外的条件下で同一の外的刺激と知覚的關係にあるとしても、知覚の内容は異なる可能性を持つのである。

知覚内容がどの程度こうした形で認知的に侵入可能なかどうか、またどのような内的な条件が知覚内容にどのような変化をもたらすのかは、知覚の経験的研究と知覚の哲学における興味深い問題である。さらに、知覚の認知的侵入可能性を認めることは、認識論における知覚的正当化・知識に関する幾つかの立場に問題を生じさせると考えられている。端的には、ドグマティズム、現象的保守主義と呼ばれる立場（のうちの幾つか）が、知覚の認知的侵入性からの問題に直面するとこれらの立場の批判者は論じている。この批判に支持者の側も応答し、現在の認識論では活発な議論が行われている。この問題は、かなり乱暴だが、以下の様な形で要約できる。

- (1) ドグマティズム、現象的保守主義によれば、認識主体  $S$  が  $p$  という内容の知覚経験（現れ）を持ち、かつ阻却理由を持っていないならば、 $S$  は  $p$  と信じるための（ある程度の）阻却可能な正当化を持っている。
- (2) 知覚が認知的に侵入可能であるならば、 $S$  の  $p$  を真にしたいという単なる欲求など、 $p$  の真理に直接関わりのない  $S$  の内的条件によって、通常  $p$  という内容を持たない知覚経験が  $p$  という内容を持つことがありうる。
- (3) (2)の可能性が成立しているとき、 $S$  は  $p$  と信じるための（いかなる）阻却可能な正当化も持っていない。
- (4) したがって、ドグマティズム、現象的保守主義はそのままの形では維持不可能である。

本発表では、以下の三つのことを行う。第一に、この問題に対する既存の応答を紹介し、筆者自身の応答も提示する。第二に、これらの応答の前提を明示し、それらを

完全に擁護するには、知覚の侵入可能性、知覚のメカニズムについてのより詳細な探求が必要だということを明らかにする。第三に、こうした探求の必要性の認識論に対する方法論的意義を論じ、知覚の哲学と知覚についての経験的探求が認識論に与える可能性と制約について、簡単にまとめる。知覚の哲学と知覚の認識論の関係は様々でありうるが、知覚の認知的侵入可能性に喚起された近年の認識論の議論を参照しつつ、その関係の一つのあり方を描き出してみたい。